

ミッドサマー・

MIDSUMMER KILLING — Trevor Barnes

キリング

真夏の殺人——トレバー・バーンズ/矢沢聖子—訳



ミッドサマー・キリング

T.バーンズ^{やぎわせいこ}|矢沢聖子 訳

© Seiko Yazawa 1992



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1992年5月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

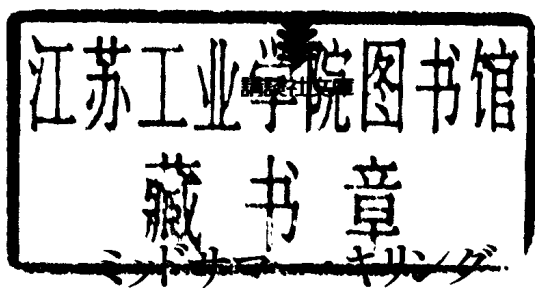
印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。

(庫)

ISBN4-06-185201-9



T.バーンズ | 矢沢聖子 訳

講談社

目次

ミッドサマー・キリング

訳者あとがき

A MIDSUMMER KILLING

by

Trevor Barnes

© 1989 by Trevor Barnes

Japanese language original paperback edition rights

arranged with

Trevor Barnes

c/o Heather Jeeves Literary Agency Inc., London

through

Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

ミッドサマー・キリング

●主な登場人物

ブランド・ハンブトン スコットランド・ヤ

ードの女性警部

ロジャー ブランドの別れた夫

デクスター・バザルジェット 巡査部長。ゲ

イで黒人でカトリック信者

ブライアン・スピタルズ 警視正

クリステイン・ミルズ 作家

グレアム・ミルズ クリステインの父

レイノルズ 管理人

ディキンソン 公安部の警部補

マデリン・ホーキンズ グレアムの元妻

ロバート・ボロック グレアムの友人

エヴェリーン ロバートの妻

クレイグ マデリンの夫

タチアナ・ノヴォク チズウィック在住の女

マイケル・スミス グレアムの会社の元マネ

ージャー

ボランスキ グレアムを脅迫した男

アーカート 謎の人物

ズビグニュー タチアナの夫

マレク ズビグニューの息子

ジューゼフ・タクゼク グレアムの友人

ターデウシュ・スウォツド 歴史学者

ケイブロン K8の部長

一章

流行に敏感なジョガーたちが、毎日すぐそばを息をはずませながら通りすぎていった。恋人たちはゆっくりと通りすぎ、母親たちは子どもを叱りつけながら行きすぎていった。彼らはバラバラ死体からほんの数ヤードのところを通過していったのだ。ブナとライムの木から落ちた小枝の下に湿った地面で腐敗しつつある死体のすぐそばを。結局、遺体の発見者は人間ではなかった。そもそもイギリス人という国民は詮索好きな人種ではない。悪臭がただよってきても、そのまま数日ほっておけば、自然に消えるだろうと考えるような国民だ。悪臭は、口論と同じで、当事者だけの問題だと考える。ハムステッド・ヒースで最初に遺体を嗅ぎまわったのは、ポーランド人

夫婦が飼っていた雑種犬だった。どういうわけか、担当警部はその犬の名前をおぼえていた。キシエルだ。これは果物を使った甘酸っぱいポーランド料理の名前である。

その夏は異常な暑さがつづいた。何週間もつづけて温度計は昼も夜も三二度前後をさまよい、ロンドンには雲ひとつない澄みきった青空におおわれた。ロンドンっ子は嬉々としてセーターやレインコートをぬぎすてた。OLたちはビキニ姿で日光浴を楽しんだ。セント・ジェームズ・パークでは、どこかのビジネスマンがペリカンの池を横ぎって芝生の中央に出ると、おもむろに服をぬぎ水泳パンツだけになって、白いふくふくした身体をブリーフケースのそばに横たえたものだ。だが、一週間もすると、暑さは耐えられないほどになった。当初の喜びはいつのまにか苦痛に変わった。エアコンはパンクし、雨さえ降ればさほど気にならないはずの紙屑が、溝をふさぎ、通りの隅にうずたかく積もるようになった。ときおり思い出したように風が吹くと、砂が目に入る。どこまでもテラスハウスがつづくテムズ川の南側から、海に向かってぬかるんだ土手をゆったりと通りすぎるあたりの殺風景な高層ビルが空に突き出ている東、さらには木の多い北、西の郊外にいたるまで、じとじとした蒸し暑さのなかでも窓という窓が開放たれ、昼のあいだに少しでも空気を入れて、長い熱帯夜にそなえようとしていた。ロンドンじゅうが猛暑にうんざりしていた。

ブランチ・ハンプトンは、だれよりもこの猛暑にまいていた。外界の暑さが心のなかのたぎるような怒りをますますかきたてて、もはや爆発寸前だった。五年近い結婚生活のあいだも、ひ

よつとしたらという気持ちはあった。ひよつとしたら夫は卑劣な男なのではないか、と。そして、一カ月まえに帰宅したとき、その決定的証拠を見つけたのだ。キッチンテーブルにおいてあった一通の手紙。判読不能に近いロジャーの筆跡で彼女の名前が書いてあった。クモが上等の封筒のうえでハラキリしたみたいだ（ブランチは封筒にかぎらず文房具のたぐいはよいものを使っていた。文房具の質は育ちと同じぐらい大切だと母親に教えこまれたからだ）。ブランチは封筒を見つけた瞬間、につこりしたものだ。うだるように暑い日曜日の午後、くずれるようにソファに腰をおろして、あの手紙のことを考えると、あのととき微笑んだことに新たな怒りをおぼえた。あれはお人よしの微笑、ブルータスに短剣を突き刺されるまで彼を信頼しきっていたシーザーの微笑だった。ロジャーのへたくそな文字の羅列は、恋人ができたので家を出ることにしたという告白だったのである。

読みすすむうちに、鼓動が高くなり、熱いかたまりが胸の奥からこみあげてきた。たつぷり五分は泣いていただろうか。発作的に涙があふれてきたというよりは、胸が激しく波打って、そのままでは胸郭が破裂しそうだった。面と向かって告白する勇氣すらなかったのかと思うと、怒りはむなしい自己憐憫に変わった。汗がTシャツの胸から脚のつけ根に流れ落ちるのを感じながら、ブランチは夫の卑劣さに対する軽蔑をふたたびかみしめていた。長い指でエレガントなソファの腕をいらだたしげにたたきながら、腫れぼったい目で雑然とした室内——ここ教週間というものの、掃除などする気にはなれなかったのだ——を見まわした。隅にあるヴィクトリア朝様式の

サイドボードの上でふと目をとめた。どことなく不自然な感じがする。ブランチはその理由に思っていたとはとした。四週間まえまでそこに飾ってあった結婚写真を、机のいちばん下の引き出しにしまいこんだのだ。そうすることで、つらい思い出はファイルや小物類の下にうずめてしまったものと信じていたのに。ブランチはむっちりした腿をソファからおろした。めったにないことだが、自信を喪失しているいまは、脚がもつと細かったらと思わずにいられなかった。机のところへ行つて、引き出しから写真を出してみた。ロジャーといっしょに結婚登記所の階段に立って笑っている写真だ。二人とも妙ににやけた顔をしている。ブランチは決意をかためると、額縁の裏のテープをはがして写真を取り出した。

握りしめたハサミの刃が、新婚夫婦の取り合つた手の間に喰いこんでいく。次の瞬間、写真は、そしてそこに写つたカップルはまっ二つになった。いまとなつては、職場では旧姓で通していたことがつくづくありがたかった。ブランチは復讐の白昼夢にひたりきっていて、電話のベルが数回鳴るまで気づかなかつた。

「ハムステッドのジェームズ巡査部長ですが」電話の声にはロンドンなまりがあつた。「エニシング」は「エニフィニク」となり、Hの音は消えて、母音も平板な発音となる。「実は、アムステッド・イースで変死体が発見されました」

相手はそこで言葉を切つた。あとはブランチが引きとつて会話を進めてくれるものと思つたのだらう。だが、復讐の鬼と化していた彼女はとっさに返事ができなかつた。

「首のない死体で……」

ハサミが前夫の腰のあたりをばちんと切った。

巡査部長はブランチの沈黙に当惑しながら、ためらいがちに言った。「死後かなり経過しています」不快そうな言い方だ。目のまえのデスクまで死臭がただよってくるとうもいうようだ。

「警部補は変死体にまちがいないと言っています。ただちにヤードにお願いしたいということです、こうしてお電話しているのですが」

ブランチはカムデン行政地区の警官たちと落ち合う場所を確認した。「わかりました」彼女はきびきびと答えた。「すぐ行きます」ハサミの刃がスーツの膝に入り、前夫の脚がばらばらになった。ブランチはふつくらした唇の端に笑みをうかべながら、写真をさらに切りきざんだ。やがて、ダイニングテーブルのうえには小さな四角い断片の山ができた。それを屑籠にほうりこむと、ここ一カ月のあいだ感じたことのなかった爽快な気分になった。また頑張れそうな気がする。

スコットランド・ヤードの女性警部は、汗ばんだ服を着替えるためにメゾネットの階段を駆けあがった。少ししまえまで窓のカーテンを膨らませていた微風も、いつのまにかぱたりと止まっていた。突然、しあわせな気持ちがかみあげてきた。ブランチはロジャールの亡霊を追い払う儀式をおえたことに満足し、仕事を持っていることに心から感謝したくなった。

なにもかも干からびて埃っぽかった。ハムステッド・ヒースの木々はしょんぼりとうなだれ、葉は乾燥して色あせていた。公園の入口という入口には決まって不精髭をはやしたみすばらしい男が二輪車をとめて、アイスクリームやコココーラを売っていた。

ブランチを案内した巡査はフライティと名乗った。まだ少年のような若者だ。二〇歳という話だが、そばかすだらけの顔やもじやもじのヘアスタイル、甲高い声は、一六歳といっても通りそうだ。ブランチが公園の正面入口のそばに車をとめると、若い巡査は先に立って、日光をあびてきらきらと輝いているケンウッド・ハウスのほうへ歩きはじめた。

「これは俺が担当する初めての殺人事件なんですよ、警部。そこへもってきて、捜査の責任者が警部だっていうんでしょう。俺も女房も新聞で見たんですよ、警部の写真。たいしたもんですね」

ブランチにはすぐになんのことかわかった。最近担当した二件の殺人事件の特集記事のことだ。写真というのは、あまり写りのよくない写真で、男のように両足をひろげ腰に両手をあててつつ立っているところを撮られたものだった。その記事のコピーがフロアのあちこちの掲示板に張り出されたときは、人のいないすきを狙って、はがして歩いたものである。

それを思い出すと、歩幅を縮めた。気を抜くと、つい脚をひろげて歩く癖が出て、やや扁平足なのを強調する結果になってしまう。だから、めったに走ることはなく、必要に迫られたときには、ヒールのないべたんこの靴をはいた足をぶかっこうに精一杯はたばた動かすことにしてい

る。六フィート近い長身のおかげで、いまのように数インチ背の低い相手と歩くときは、やや前かがみになる癖がついていた。

「ものすごい臭いですよ、吐きそうになるほど。なにしろ、首は切り落とされているし、ほかの部分だって……お聞きでしょうが」

フランチは立ちどまって、左目を細めた。なにか考えこんでいるときの彼女の癖だ。

フライティは警部が急に立ちどまったのにめんくらって、落ちつかなくなった。「ご存じないんですか？」ややためらってから、言いにくそうにつけ加えた。

「なにを？」

若い巡査は警部の視線を避けて、汗まみれのシャツを引っぱった。「死体はほかにも切り取られたところがあるんですよ」フライティの陽気さはすっかり影をひそめた。すべすべした顔をしかめて不快そうな表情をつくると、また一瞬ためらってから、思いきって言った。「寧ろを切り取られているんです。まったく、ひどいもんだ」

二人はケンウッド・ハウスのそばの小道がとぎれるところへ出た。両側はスイカズラの茂みだ。フライティが谷のむこうを指さした。「あそこです。もうみんな来ているはずですよ」

関係者は白いビニールテープで囲った傾斜地の上に集まっていた。地元警察の捜査主任、藪のなかを走りまわって写真を撮っている撮影技師、指紋検出係、犯罪現場主任。地元警察の捜査主任ベセルトン警部補は、瘦せて背の高い、眼鏡をかけた男だった。金褐色の髪が一握り、後退し

つつある生えぎわにわずかに残っている。勤務をおえて一杯やっていたらしく、顔が赤らんでいた。口元はへの字に結ばれ、笑うとその両端がちよつとあがる。だが、くたびれた中年男のわりには、彼はよく笑うほうだった。

ブランチが現場についたとき、ペセルトンはアスファルト道路のわきに建てられた休憩所のそばに立っていた。名乗りでると、明らかにどきまぎした様子になった。充血した目はあらぬ方向に向けられ、右手でハエでも追い払うようにせわしなく後頭部をなではじめた。まさかスコットランド・ヤードから女性の警部がやってくるとは思ってもしなかったのだろう。緊張したせいか妙に南西部なまりをめだたせながら、その日曜の朝、犬が遺体を発見したいきさつを説明しはじめた。

「巡査の話では、首がないそうですね」

警部補はうなずいた。「切り落とされたようですな。付近には見あたりません」

ブランチはいつものように相手の説明を熱心に聞くことで、ペセルトンの緊張をほぐそうとしたが、この殺人事件の微妙な部分に触れるきっかけをつくるのが自分の義務のような気がした。

「ほかに切断されたところがあるとか……」

ペセルトンはまるで口にできない問題に触れたかのように当惑して、視線を藪に落とした。ブランチは相手の過敏な反応にいらいらした。またしても女性警部ならではのやっかいな障害を乗り越えなければならぬと思うと、うんざりしてくる。これは世間というよりむしろ同僚

の男性に特有の偏見だった。

「睾丸がないんですよ」ペセルトンが吐きだすように言った。

フランチはあわてて話題を変えた。「それで、検死官は？」

「幸運でしたよ。ラクストンが来てくれましてね」ペセルトンはなだめるような笑みをうかべると、湿地に向かった。そこまで来ると急に温度がさがった。日の光も木々にさえぎられて、地面まで届かないのだ。一行はそれとわかる程度の、めったに人の通らない小道を一〇ヤードほど進んでから、右手の藪のなかに分け入った。両側に木々やハリエニシダ、野生のブラックベリー、野バラなどが少しでも日光を得ようと競いあっている。枝をかきわけながらさらに数歩進むと、一群の捜査課の警官と、遺体をやじうまの目から隠すための不透明のビニール・テントが見えた。それを見て、フランチははっとした。「まだ報道部には知らせていないでしょうね？」

「悪い冗談はやめてくださいよ」

フランチは安心した。ジャーナリストという人種はどうも信用できない。準備が整うまで新聞記者には知られたくなかった。いずれにしても、彼らは殺人事件をかきつけずにはいないだろう。彼女にできるのは、ただ避けられない事態を先のばしにすることだけだった。

巡査部長に電話を入れるのを忘れていたのに気づいた。フランチは紙きれに巡査部長の名前と電話番号を走り書きすると、いまだ興奮さめやらぬ顔でうろうろしているフライティ巡査に伝言を頼んだ。